

◆ 太陰病まとめ（補足）

太陰病は陰病の始まりであり、陰陽失調により陽気の不足を生じる。したがって虚証に属す。ただし陰陽失調の程度は少陰病よりは軽度である。関連する臓腑としては、小腸・胃・脾（ときに腎）である。

傷寒論においては、陰陽失調が臓に及んでいるものが「陰病」であり、外殻や腑にとどまるものは「陽病」である。例えば陽明寒証は、その病理は胃・小腸・大腸等の腑にあり、臓にはない。陽明寒証は強力な寒邪による腑への一種の直中であり、裏の寒実証といえる。寒邪により、腑の陽気が押さえ込まれ、その結果、一見陽気が不足した状態と近くなる。

一方、太陰病は虚証であり、陽明寒証とは虚実の違いがある。したがって表証を兼ねない太陰病の脈は、例えば沈細を呈す。一方、陽明寒証は、沈細であっても緊や弦を呈するはずである。

太陰病は、陰陽失調の程度は陰病の中では比較的軽度であり、陽病からの伝変あるいは誤治によって生じる。

「辨太陰病脈証併治第十」において太陰病は以下の4つに分類することができる。

① 太陰病で太陽病の併存をみるもの

第276条 「太陰病，脈浮者，可発汗，宜桂枝湯。」

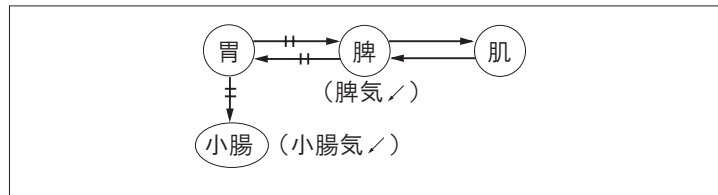
脈浮なので、太陰病よりは太陽病の方が主であり、一般の桂枝湯証よりは正気が虚しており、病は表のみでなく裏にも及んでいる。裏の臓としては「脾」、腑としては「胃」「小腸」に影響し、下痢・腹満・腹痛・嘔吐等の症状が出現する可能性がある。ただし裏における陰陽失調の程度は軽度であり、桂枝湯にて表邪を除き、裏の陰陽失調を整えれば治癒する。桂枝湯にて裏の脈中の血、脈外の気をめぐらせることにより対応している。

② 誤治により太陽病から内陷したもの

第 279 条 「本太陽病，医反下之，因爾腹滿時痛者，属太陰也，桂枝加芍薬湯主之。大実痛者，桂枝加大黄湯主之。」

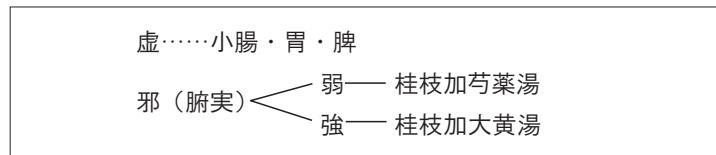
太陽病を誤下して邪が裏に内陷する。そのため裏における正気，小腸・胃・脾の陽気が損傷される。

胃気の損傷により，胃気の供給および守胃作用が失調し，胃気の小腸・脾への供給，脾への貯蔵，貯蔵された脾・肌から胃気への転換ができなくなる。



胃気の小腸への供給不足により小腸の気は減少し，伝導作用が失調し「腹滿」を生じる。この腹滿は「虚滿」であり，若干の邪（腑実）の存在に対しては，六両の芍薬で対応する。より邪（腑実）の存在が大きくなったものは「大実痛」となり大黄二両を加える。

つまり，これら 2 処方 の証は虚実夾雜証である。



③ 疾病の経過のなかで邪の存在よりは，むしろ陽気の不足を主とするもの

第 277 条 「自利，不渴者，属太陰，以其蔵有寒故也，当温之。宜服四逆輩。」

疾病の過程で胃・小腸・脾および腎の陽気が損傷を受ける。ただし，少陰病ほど著しくはないため，「下痢」はしても「清穀下痢」とはならず「厥冷」もない。しかしこの状態からさらに陽気が損傷されると少陰病になる。

この証は太陰と少陰の間にあるため，少陰へならないための予防も兼ねて四逆輩を投与する。

参考：厥陰篇

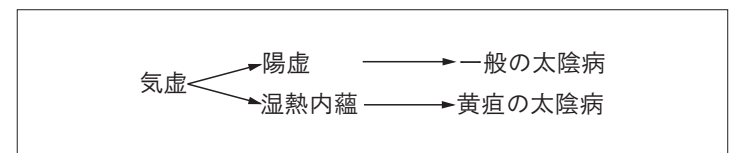
第 372 条 「下痢腹脹滿，身体疼痛者，先温其裏，乃攻其表。温裏宜四逆湯，攻表宜桂枝湯。」

この条文は厥陰篇に入っているが，「下痢」「腹脹滿」からむしろ太陰篇に入れるべき条文と考える。この条文の証は太陽太陰が併存しているものであり，①に属するが，裏虚の程度が「太陰桂枝湯証」よりは酷く，分類上③にも通じる。

④ 太陰湿熱黄疸証

前述した 3 つの太陰病は疾病の過程で一定の陽気を損傷する。③は太陰病のなかでは最も陽気の損傷は著しい。

しかし④は，脾・胃の気虚から内湿を生じ，陽気の不足の程度が軽いため，むしろ湿が気を阻んで熱を生じ，湿熱内蘊となり，尿不利が同時にあれば黄疸を発す。



第 278 条 (太陰, 発黄)

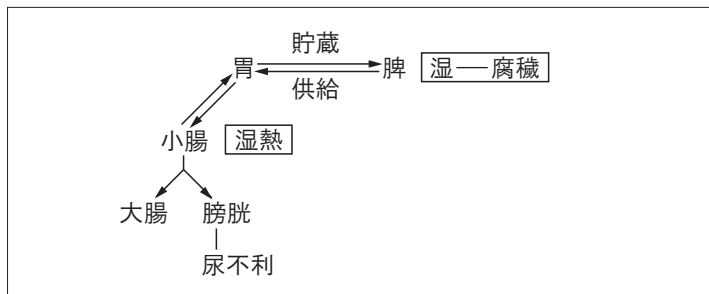
「傷寒脈浮而緩, 手足自温者, 繫在太陰。太陰当発身黄。若小便自利者, 不能発黄……」

陽明湿熱証の発黄と病理機序は近い。しかし陽明と太陰を区別するものは何か?

陽明発黄証は, その病理の中心は小腸の湿熱である。一方, 太陰の場合, 「脈浮而緩, 手足自温者」から少なくとも少陰四逆湯証に繋がるような陽気の不足はない。また, 「手足自温」より「寒湿」による発黄でもない。これらより病理産物としては「湿熱」が存在することがわかる。

「……至七八日, 雖暴煩下痢, 日十余行, 必自止。以脾家実, 腐穢当去故也。」

脾胃の不足より生じた湿が脾にも貯留し「脾家実」(腐穢)となる。脾胃の気は不足しているが圧倒的陽気の不足はない。そのため, 生じた湿は内蘊し湿熱となる。したがって, 小腸・胃・脾の臓腑に病理が存在する。



ただし, 湿熱における熱の程度は陽明に比較して軽い。

陽明 発黄: 湿<熱

太陰 発黄: 湿>熱

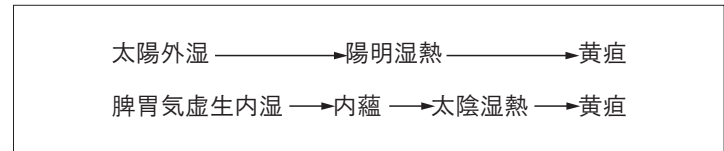
第 187 条 (前半は 278 条と同じで後半部)

「……至七八日, 大便鞭者, 為陽明病也。」

以上より, 大便の硬さにより陽明・太陰を区別しているのがわかる。

大便硬: 陽明 大便軟一下利: 太陰

また, 陽明・太陰の発黄証を別な角度からみると, 主として外湿(太陽)から起こるものが陽明で, 疾病の経過中陰陽失調(脾胃気虚)から内湿が生じ, 内蘊して湿熱となり黄疸を発するのが太陰である。



◆ 太陰病と陽明の寒証について

これら両証ともに症状は大変近いものがある。

ただし寒邪による病理が, 胃小腸腑に限定されているものを陽明の寒証とする。例えば第 243 条「食穀欲嘔, 属陽明也, 呉茱萸湯主之……」, また邪が口から直接胃腸に侵入し, 嘔吐・下痢を生じる霍乱病の一部も陽明寒証といえる(第 386 条, 理中丸証)。

太陰病と陽明の寒証の違いは, 太陰病においてはその病理が臓に及んでいる点である。例えば陽明の寒証で発症し, 胃寒の状態が強い, あるいはすぐに治癒せず長引いて脾に病理が及ぶと太陰病となる。脾の陽気が不足し, 脾における胃気の貯蔵ができなくなると, 胃気は上逆「吐」したり小腸に下流「利」したりする。また小腸の気の不足は, その伝導作用が失調し, 虚満「腹満」を呈することになる。

まとめると, 太陰病は陽気の不足が存在する虚証である。一方, 陽明寒証は寒邪の胃・小腸への直中による一種の寒実証である。